

# 摂津名所図会 卷六より

## 昆陽寺鐘銘（読み下し文）

一院を建立す。

院家の總ての土地は何もなく荒野である。

一力所

肆至（四方への限り）東は伊丹阪限り。南は笠家堤限り。

池十二個所

西は武庫川限り。

北は後通墓限り。

大小

四至内に在り

摂津の国川邊北条武庫東條に在り。

金堂壱宇。（字は建物と単位）三間四面瓦葺面。講堂壱宇。五間四面檜皮葺き。

法華堂壱宇。常行堂一字。塔二基。各五重。鐘樓一字。經藏一字。各瓦葺き。高倉二字。僧坊三字。雜舍二字。大門一字。

安置し奉る薬師瑠璃光仏。半丈六像。十一面觀自在尊靈像。梵天帝釈像。各一駆。各僧正自作。

菩薩礼拝石一面。広さ一畳。厚さ三寸。法具 大幡。二流れ。樂器壇具花器等。

右壱院建立の縁起は、本願行基大僧正、鎮護國家利益衆生の奉為に、天平五年癸酉、猪名野无生浅薄の地を点じて草創する所なり。天竺婆羅門僧正朝覲の始め、行基僧正は是れ文殊の化身なることを知り、國王大臣、専ら帰依を致し、万民百姓悉く渴仰を成す。爰に菩薩公家に奏聞し、猪名の荒野を申請し、四至を堺し、榜示を立て、手自ら水田一百五十町を開発し、院家に施入して永く国郡をして摂領せしめず。只毎年七十二度の神事仏事を勤修し、大上天皇御祈所と為す。所は院家地利与ふる所を以て聾盲瘡瘍孤独卑賤の類の為めにす。若し末世に臨んで、國王大臣国吏万姓、我院家を忽諸にし摂領を押へしむる者は、日月星宿転変し、旱魃暴風の難競ひ起り、四海共に已に滅して満足せん。菩薩遺誠して五人弟子に付属し、番々出世し、我院家を守護し三会の期に相続すべし云々。本縁起広く五箇国内の建立僧尼院四十九所、布施屋九所、船息二所、橋梁六所、堀河四所、漑柵三所、池十四所、堺二十所、溝流七所、大井垣一所を取る。直所に蒼生をして其利に得しめんと欲す。大僧正天平勝宝元年己丑二月二日を以て遷化、遺誠して光信法

師に付属して、門跡相繼宜しく検知を加ふべく、能事を龍華に貽す為めに起文を鳧鐘に統（二刻）鏤す。于時天平勝宝元年己丑二月十五日。遺弟修行師位法師法義。修行師位法師清淨。進守大法師首勇。修行法師光信。修行師位法師善添。持住位僧福尋等之を記す。

天平勝宝元年己丑二月十五日之を雕る。

粵に菩薩有り。行基と奉号す。鷲嶺に足を躡し、親しく真門に聴く。

馬台に現形し、普く率土を化す。初て荒原を開き、迺ち吾寺を建つ。

一鳴鐘を鋤て、四至の榜を銘す。漸く澆濁に暨び、乍ち白波に没す。

建立の歳、重て造成を企て、捨墮屢廻る。蒲牢惟撓。

今鎔範を致し、亦記文を鏤す。万人財を投じ、衆僧力を勧せ、

定て本願を知る。遙に中懷に鑑み、此礪功を廻して、彼の聖運を資く。

金輪久く転じ、玉燭鎮へに明なり。柳營風静に、松算歲昌なり。

太守を翼輔し、衆機を掌詮す。累葉奕世、大椿齡を譲る。

法主を護持し、私窓を恢弘す。惠風久業、法水遍灑、

寺中安穩、三会期に至る。境内豊饒、九年の畜に跨る。

洪音至る所、各長眠を驚す。余に薰じ修く覃む。齊く極苦を脱す。

十界無量、共に日宮に処す。一切の有心、同じく月殿に遊ぶ。

于時嘉曆改元歳仲冬十七日なり。

別当権律師法橋上人位慶瑜

# 昆陽寺鐘銘（現代語訳）

右の院を建立した由来は、本願の行基大僧正が、國家を安泰にし、衆生に恵みを与えるために、天平五年癸酉に猪名野という、生物もおらず恵みの薄い地を選んで草創したのである。天竺の婆羅門僧正が我が國にやつてきた当初、行基僧正が文殊菩薩の化身であることを知つてから、国王も大臣もひとえに行基に帰依し、民衆はすべて行基を崇め尊んでいた。そこで行基菩薩は朝廷に奏上して、猪名の荒れ野を請い受け、四方の境界を画し、それを示す掲示を立て、みずから水田百五十町を開墾し、それを寺院に寄付して長らく国や郡に領有させないこととした。ただし、毎年七十二度の神事仏事を行い、太上天皇の御祈所とした。その地の寺院の収益を与える理由はといふと、盲人や聾啞者、身寄りのない者や身分の低い者のために用いるのである。もし後の世に、国王や大臣や役人やあらゆる民衆が、我が寺院を粗略にしたり領地を押さえさせようとするれば、日や月や星の配置が一変するほど世の中が変化してしまい、旱魃や暴風のような災難が競うように次々と起こり、世界がすべて滅んで、ようやく満足するといったことになるであろう。行基菩薩は遺訓を残して五人の弟子に託し、「相次いで諸仏が現れ、我が寺院を守護して、弥勒菩薩が龍華三会を行われるときまで続くであろう」ということであつた。この由来書は、広く五箇国とのなかの行基建立の僧院・尼院四十九所、布施屋九所、船着き場二所、橋梁六所、堀河四所、灌漑用溝渠三所、池十四所、堺二十所、溝流七所、大井垣一所を採録している。ただその場所場所で民衆に利を得させようと思つてのことである。大僧正は、天平勝宝元年己丑二月二日に亡くなられ、遺訓を残して光信法師に託し、門下の者たちが相繼いで検分せよとのことであり、なすべきことを龍華三会のときまで残し伝えておくために記録を鐘に銘文として刻ませた。時に天平勝宝元年己丑（七四九年）二月十五日。遺弟の修行師位法師法義、修行師位法師清淨、進守大法師首勇、修行師位光信、修行師位法師善添。持住位僧福尋等がこれを記した。

天平勝宝元年己丑（七四九年）二月十五日、これを彫つた。

ここに菩薩がおられる。行基と申し上げる方である。靈鷲山に足を踏み入れ、仏教という眞実の法門に耳を傾けられた。日本に現れると、広く国内を教化された。荒れ野原を初めて開拓し、そこに我が寺を建立された。一つの鐘を鋳造して、寺の四方の境界の掲示文を刻まれた。鐘は次第に汚れにまみれ、たちまち白波の間に失われてしまつた。この寺の建立の歳に、再び鐘の造成を計画し、できあがつてしまらく年月が経つたところ、鐘はただ欠けてしまつた。今、あらためて鐘を鋳造し、記録文を刻む。多くの人が財産を投じ、多くの僧侶が力を合わせて、間違ひなく本願が行基菩薩であることを知つた。遠く行基の心中に従い、この小さな功績を知

らせることによつて、帝のご運勢の助けとするものである。帝位は長らく受け継がれ、平和な世の中は永久に明らかである。幕府は穏やかで、天子のご寿命もますますさかんである。国守を助け、民心を掌握し、子孫代々、大椿の木が自らの長寿を譲つて長命となる。仏教を守り支え、個人的な流派も盛んにする。お上の恵みは長く手厚いものであり、仏教の恵みも広く注がれる。寺の中は平穏無事で、それが龍華三会のときまで続く。境内は実り豊かで、九年分もの十分な蓄えに達するほどである。鐘の大きな音のおよぶところでは、皆が永い眠りから目を覚まし、先人の偉大な恩恵を長い間深めてゆき、そろつてはなはだしい苦痛から逃れることができ。あらゆる世界の数え切れない衆生は、日月のいるという美しい宮殿を訪れたかのような幸福な気分になることであろう。

時に嘉曆と改元した歳（一三二六年）の十一月十七日

別当権律師法橋上人位慶瑜

## 〈語釈〉

○縁起　社寺、仏像、宝物などの由来、または靈験などの伝説。また、それを記した文書。

○本願院、塔、仏像などを創立し、法会ほうえを発起すること。また、その人。

○鎮護國家　國家のわざわいをしずめ、安泰あんたいにすること。

○利益　仏菩薩などが衆生など他に対して恵みを与えること。

○衆生　迷いの世界にあるあらゆる生類。仏の救済の対象となるもの。いきとしいけるもの。

○浅薄　浅く薄いこと。厚味を欠くこと。また、そのさま。

○点ず　多くの中からしるしをつけて指定する。また、人や物や場所・日時などをえらびさだめる。

○婆羅門僧正　天平八年（七三六）に渡來したインドの僧。中国五台山から遣唐使とともに来朝し、天平勝宝三年（七五一）に僧正となり、婆羅門僧正と称される。大安寺に住み、天平勝宝四年に大仏開眼の折の導師となる。行基があらかじめその来朝を知り、難波の浦に迎えた説話が著名。バラモン出身であつたため、日本で俗にこの名で呼ばれた。

○朝覲　諸侯または属国の主などが参朝して君主に拝謁すること。

○渴仰　仏を深く信じ仰ぐこと。転じて、人や事物を尊び敬うこと。

○公家こうか　朝廷。「こうか」もしくは「こうけ」と読む。

○奏聞そうもん　天子に奏上すること。

○四至　所有地、耕作地、寺域などの東西南北の四方の境界。

○榜示ぼうじ　領地・領田などの境界を示すために、杭・石・札などを立てる。また、その立てたもの。

○開発  
開墾。

○院家  
院に同じ。寺院。

○施入  
神仏に財物を寄進すること。布施として納めること。

○摂領  
「摂」は取ること。「領」は所有し支配すること。

○勤修  
読経など、仏道の行を勤め修めること。

○太上天皇  
「太上天皇」とも書く。譲位した天皇。

○祈所  
祈祷をするところ。

○地利  
土地から上がる収益得分。

○瘡痏  
話したり聞いたりする機能が失われていること。聾啞。

○万姓  
多くの民。あらゆる民。

○忽諸  
上の命令などをないがしろにすること。「こつしょ」もしくは「ゆるがせ」と読む。

○星宿  
星に同じ。

○四海  
四方の海のうちの意から、国内のこと。世界。

○遺誠  
故人が後々のためにこした戒めの言葉。遺訓。

○付属  
仏語。師が弟子に仏法の奥義を伝授して、それを後の世に伝えるよう託すること。

○番番出世  
仏語。諸仏が順を追つて世に出現すること。また、一仏が衆生教化のため姿をかえてつぎつぎに世に現わること。

○三会  
仏が成道ののち、衆生を済度するために三回行う説法会の総称であるが、釈迦入滅後、五十六億七千万年のうちに弥勒菩薩がこの世に現れ、龍華樹の下で成道の晩に上・中・下根の衆生のすべてを、三回の説法会で済度するという弥勒のそれが最も有名。

「龍華暁」 「龍華三会」 「三会暁」ともいう。

○相続 物事が絶えまなく続くこと。

○布施屋 奈良・平安時代、主要道路中の要所に設けられた緊急用の宿泊施設。

○船息 「息」は休むこと。船着き場。

○溉桶 「溉」は田や池などに水をひくこと。「桶」は水を通す溝。

○大井垣 「井垣」は鳥居などの両脇から造りつけた井の字形の垣のことであるが、「斎垣」（森や神社の、みだりに越えてはならぬ垣）のことか。

○蒼生 民衆。

○遷化 仏語。高僧、隠者などが死ぬこと。

○門跡 祖師から継承する法流。また、法流を継ぐ門徒、さらにその門徒が住持する寺家・院家のこと。

○検知 検分して調べること。

○能事 なすべきこと。

○起文 「記文」のことか。記録した文書。

○鳩鐘 「中国の古伝説で、鳩氏がつくつたといふところから、一般に釣り鐘のことをいう。

○統鏤 「統」は「わる」と読むが、「刻」の誤りであろう。「鏤」は彫りつけること。

○奉号 「奉」は謙譲の意を表す。「号」は呼ぶこと。

○鷲嶺 「じゅれい」もしくは「しゅうれい」と読む。靈鷲山のこと。釈迦(しゃか)の説法教化の地。

○躡 踏む。

○真門 真実の法門。

○馬台 「邪馬台」の略。日本のこと。

○普 あまねく。ひろく。

○率土そつと 地の続くかぎり。国土のはて。「そつと」もしくは「そつど」と読む。

○化 教化する。教え導く。

○闢 ひらく。開拓する。

○澆濁 語義未詳。「澆」は、そそぐ、または、うする。「濁りを注ぐ」、すなわち、泥にまみれて失われた、の意か。

○白波 しらなみの他に、盜賊の意もある。鐘が盜賊に奪われた、との意を表すか。

○揄躡 語義未詳。「揄」は、あげる、うごく、ひく、等の意。「躡」は、ふむ、めぐる、ゆく、わたる、または星の運行の意。星の運行が動くことがたびたびに渡る、つまり、歳月が経過するの意か。

○蒲牢ほろう 鐘のこと。本来、想像上の海獣の名。鯨に襲われると大声を発するとされるので、その首をかたどって鐘のかぎりにつけ、撞木しゆもく を鯨にみたてて、鐘の音が大きいのを願う。また、そのかぎりや、そのかぎりをつけた鐘。転じて、ひろく鐘をさす。

○攬 「缺」に同じ。かける。

○鎔範 金属をとかして型に入れること。

○中懷 こころのうち。

○鑒 「鑑」に同じ。かんがみる。手本として従う。

○礪 「微」に同じ。

○聖運 天子の運。

○金輪こんりん 「金輪王」から転じて、帝位の尊称。

○玉燭 四季が調和すれば、万物が玉の燭のように輝くの意から、春夏秋冬の四季が順調に移り変わること。太平で盛んな世の形容に用いられる。

○鎮 「どこしなえに」と読む。永久に。

○柳營 幕府。中国漢の將軍周亞夫が匈奴征討の時に細柳という地に陣し、軍規正しく威令がよく行なわれたという「漢書・周勃伝」の故事による。

○松算 「聖算」ともいう。天子の年齢。

○大守 中国古代の郡の長官。ここでは、国守の意か。

○翼輔 「翼」「輔」とともに助ける意。

○掌詮 「掌」はにぎる。「詮」はそなえる。掌握する意か。

○衆機 「機」は、衆生の本性の中にひそんでいて、教法に触発されて働く精神的能力の意があるので、大衆の心、の意か。

○累葉奕世 「累葉」「奕世」ともに、子孫代々の意。

○大椿 中国、古代の伝説上の大木。八千年を春とし、八千年を秋とし、三万二千年が人間の一年にあたつたという長寿の木。

○法主 法門の主、すなわち仏のこと。

○恢弘 事業や制度、教えなどを世に広めること。

○私窓 語義未詳。「私」は個人。「窓」はまど。仏教の中の一教派のことをいうか。

○惠風 めぐみの感化。ここでは統治者の恩恵を言う。

○業 さかん。

○法水 仏の教え。仏の教えが衆生の煩惱を洗い清めることを水にたとえていう。

○遍灑 「遍」はあまねし。幅広い。「灑」はそそぐ。

○九年畜 礼記に「国に九年の蓄無きを不足と曰ふ」とあることから、十分な蓄えのことをいう。「畜」は「蓄」に同じ。

○洪音 大きな音。鐘声が大きいこと。

○余薰 「よくん」と音読みべきであろう。先人の恩恵。

○修覃 語義未詳。「修」には「ながし」、「覃」には「ふかい」の訓があることから、先人から受けた恩恵を長い間にわたつてより深めてゆく意か。

○十界無量 語義未詳。「十界」は迷いと悟りの両界を十に分けたもの。迷界での地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人間界・天上界と、悟界における声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界の称。「無量」ははかりしれないほど数が多いこと。下に対句をなす「一切有心」とともに、あらゆる世界の数限りない衆生、の意か。

○日宮 太陽のいる宮殿。

○有心 <sup>うしん</sup> 仏語ではものにとらわれた心を意味するが、ここでは衆生の意か。

○月殿 須彌山の中腹を回つてているとされる月にある月天子の宮殿。

○仲冬 十一月。

文化財ボランティアの会 林 亨（文責 林 泰弘）